

ラオスの神仏 ルアンパバーン地区の寺院視察を基に

岡田文弘

1. 令和4年度ラオス世界遺産修復プロジェクトについて

令和5年2月17日～3月11日、身延山大学国際日蓮学研究所と同大学仏像制作修復室を中心とする国際交流事業である「ラオス世界遺産修復プロジェクト」が、ラオス人民民主共和国のルアンパバーン世界遺産地域およびヴィエンチャン特別市において実地された。今回で第25回となる本プロジェクトは、令和2年2月の第22回事業実地以降、新型コロナウイルス感染症拡大のために渡航を断念していたため、久々の現地活動となった。

今回のプロジェクトにおいて筆者は、令和5年2月17日から2月22日までの間参加し、事業視察および学生の引率を行なった。本報告論文は、その参加活動で得られた成果・知見をまとめたものである。

2. ルアンパバーン地区の寺院視察：アハム寺院に注力して

筆者は今回のプロジェクト参加において、ルアンパバーン地区内のシエントーン寺院・ヴィシンナラート寺院・アハム寺院・タートルアン寺院・マイ寺院・パバートタイ寺院・マノーロム寺院を視察した¹。このうち、特に筆者が注目したのがアハム寺院である。

同寺院について述べる前に、ラオスの宗教についてまず概観しておく、ラオスで主に信仰されているのは上座部仏教である。ラオスの上座部仏教については「歴史的な変遷を辿ると、14世紀にスリランカ大寺派の上座仏教が移入され、今日まで人々の篤い信仰を得てきた、という言葉に総括されるだろうが、もう少し詳しく顧みるならば²」、見るべきは「仏教移入前の民間信仰との関わりである。上座

仏教はそれまでの民間信仰である精霊信仰を否定しなかったが、認めることもしなかった。1520年に即位したポーティサーラート王は、その精霊信仰と仏教の混交を許さず、精霊信仰を禁止した。人々の信仰形態は精霊に肉や魚、果実、穀物などの供犠をして、精霊を鎮めることに努めるものであったが、仏教側の解釈では、精霊は仏陀の教えに帰依したので供犠から精進の供養へと変わり、精霊もそれを受け入れると説明した。結果的には、精霊を祀ることにかわりはなく、精霊と仏教との関係を明らかにした点で、精霊信仰が仏教的信仰形態の枠組みに捉えなおされたといえる³」とのことである。

上座部仏教と精霊信仰が習合した、ラオス独特の宗教のありよう……それを如実に表す例が、筆者が今回視察したアハム寺院である。

アハム寺院はヴィスン・ナラート寺院に隣接して建立されている。境内の仏塔の丸みを帯びた形状から「スイカ寺」との愛称で親しまれているヴィスン・ナラート寺院は観光名所として有名だが、アハム寺院も注目すべき特徴を有している。それが、ラオスの民俗信仰における神格プーニュー・ニャニューとの関係である。その概要を、木村〔2017〕と田村〔1995〕の引用により以下に示す。

「アハム寺院の特徴的な部分は仏教とともにラオス特有の民俗信仰「プニュー・ニャニュー」が祀られているという点である。プニュー・ニャニューの伝説はいくつかのバージョンが存在する。諸説中において同様に語られるのが、蔓が大きく伸び太陽が遮断されたために実りを得ることができず破滅を迎えそうになる人々のために犠牲になったのがプニュー（偉大なるじいさん）ニャニュー（偉大なるばあさん）であるという点である。ラオ族は自分の祖先および救世主であるこの老夫婦を毎年正月と10月に祀る。アハム寺院内にはこのプニュー・ニャニューの仮面が箱に入れられて保存されており、上記の時期になると僧侶とは別にシャーマンによる祭祀が執り行われる」（木村〔2017〕 p.27）

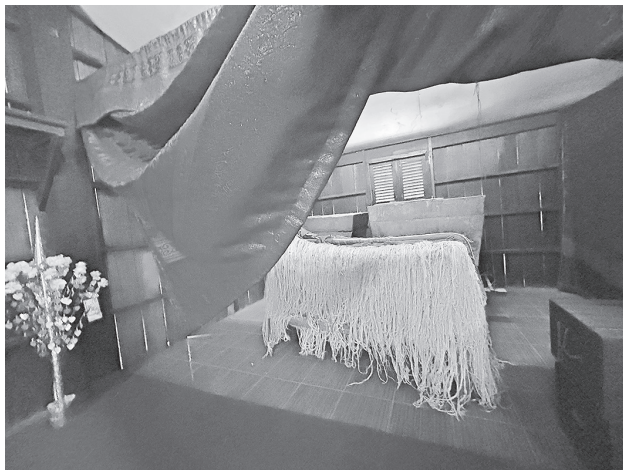
「ラオスの新年のピー・マイは、ほかの東南アジア大陸部の上座部仏教社会と同じく、水かけの祭りとして知られ、太陽暦四月半ば頃（ラオス暦五月）に三～四日にわたっておこなわれる……仏教国にふさわしく、全体の先頭を

切るのはこの町の高僧で、その車のあとに傘をかざした僧侶たちが黙々と歩いていく。沿道に膝まづく人々は、黄衣のすそに遠慮がちなふうに水をかけ、僧侶への敬意をあらわす。ルアン・パバーンの新年の行列には、これ以外に、一層興味深い独特のものが加わる。僧侶の列と美女の列の間を練り歩く、二体の仮面とそれに従う獅子の仮面である……二体の仮面は、プー・ニュー、ニャー・ニューと呼ばれており、意味は「ニューじいさん、ニューばあさん」である。……プー・ニューとニャー・ニュー、そして獅子の仮面は、ウイスン寺（ワット）に隣接するアーハム寺の境内にある精霊（神）の祠の奥にだいじにしまわれている。それらは、新年のとき以外に持ち出されることなく、人々から聖なるものとしてあがめられている。精霊の祠を管理する祭司（クワン・チャム）がおり、その職はこの一族によって継承されている。彼らの語る伝承では、かつて大木がこの世をおおって真暗にしていたのを、プー・ニュー、ニャー・ニューが伐り倒し、その下敷きになって死んだという。」（田村 [1995] pp.162-165）

このようにアハム寺院はプーニュー・ニャーニュー信仰と関わる点において、《上座部仏教と精霊信仰が習合した、ラオス独特の宗教のありよう》を示す格好の例である⁴。

なお上記の木村 [2017]・田村 [1995] に触れられているように、祭祀の時節以外、プーニュー・ニャーニューの仮面（をはじめとする様々な祭具）はアハム寺院の倉庫に秘蔵されており、一般には非公開となっているが、今回の調査（2023年）において筆者は、情報文化観光省遺産局の Sintheva SAYASANE 氏および現地担当者の方のご厚意によって入庫および撮影を特別に許可して頂いた（次頁図版参照）。これは極めて貴重な撮影であり、筆者の今回の調査において第一の成果といえるものである。重ねて、Sintheva SAYASANE 氏をはじめ関係者各位に、この場をお借りして甚深の謝意を表させて頂きたい。

ラオスの神仏アンパバーン地区の寺院視察を基に（岡田）



2-2. 付論：プーニュー・ニャーニュー伝説について

ここで、前掲のプーニュー・ニャーニュー伝説、すなわち「蔓が大きく伸び太陽が遮断されたために実りを得ることができず破滅を迎えそうになる人々のために犠牲になった」（木村 [2017] p.27）「かつて大木がこの世をおおって真暗にしていたのを、プー・ニュー、ニャー・ニューが伐り倒し、その下敷きになって死んだという」（田村 [1995] p.165）という説話（以下「蔓伐採譚」）について、筆者の専門領域である説話／文学研究の観点から若干の概観と考察を「付論」として試みておきたい。まず、この伝説について、菊池 [2002] による概略を引用してその肝要を改めて確認しておく。

「プーニュー・ニャーニューは神話の世界の夫婦であり、この夫婦にまつわる神話には様々なものがあるが、おおよそ以下のように伝えられている。クンプロム（岡田注：天の神の御子で、地上に降臨し王となった）の時代に大きな木が現れ、天界まで届くほどになった。そのため地上は寒く真っ暗になった。クンプロムは家臣を集めて誰かその木を切り倒してくれる人を探すように言った。プーニュー・ニャーニューだけが木を切ることを申し出た。出発する前に夫婦は自分たちの名を死後も覚えていてくれるように頼んだ。夫婦は小野を持って出発し、三ヶ月と三日を費やして木を切り倒したがその下敷きになって死んでしまった。その後、地上は明るく暖かくなり、平和が戻ってきた。クンプロムは夫婦のお葬式を盛大に行い、その名を末永く記憶に留めておくことを約束した。こうして、プーニュー・ニャーニューはルアン・パバーンの人々から、守護神、あるいは原初の夫婦として語り継がれていった。」（菊池 [2002] p.43）

この蔓伐採譚⁵については、Finot [1959] に含まれるバージョン（以下 Finot [1959] Ver.）が有名である。Finot [1959] Ver. は、巨樹伝説の網羅的研究である大林 [1989] において参照され、また根岸・前田 [1994] pp.7-14に「ラオスの始まり」として翻訳紹介されている（根岸の訳による）ことから、我が国におい

てそれなりに人口に膾炙しているようである⁷。

以下、根岸・前田 [1994] も参考に、Finot [1959] Ver. のあらすじをまとめてみよう。

大昔、天の神パニャテーンは、地の神である三人の王に水牛を贈った。その水牛が死ぬと、その鼻から蔓が伸び、瓢箪が実った。その瓢箪からは人間があふれ出てきた（これがラオス民族の祖となる）。

天の神パニャテーンは、瓢箪から生まれた人間たちを統治するため、息子クンブロムを派遣した。クンブロムを先導したのはヨー老人とその妻ヤーガーム (*Phu Thao Yō, Mē Ya Ngam*)、後衛はライとその妻モットという従者だった。その後、神は天地を結んでいた蔓橋を切り落としてしまった。

クンブロムが地上の統治を始めてから、育ちすぎた一本の蔓が大地を覆い、太陽を遮ってしまった。クンブロムはこの蔓を切れと御触れを出した。この危険な任務に、ヨー老人と妻ヤーガームだけが立候補し、自分たちを死後祀ってほしいとの条件で引き受けた。

老夫妻は三月三日がかりで蔓を切り倒し、その下敷きとなって潰れ死んだ⁸。こうして再び太陽が地上を照らすようになり、暗闇から解放された人々は耕作を始めた。

ここでは主人公の老夫婦の名前は「ヨー老人とその妻ヤーガーム」(*Phu Thao Yō, Mē Ya Ngam*) となっているものの、脚注によると「*Phu Yū Ya Yū* (プーニュー／ニャーニュー)」として知られているとされる⁹。

この Finot [1959] Ver. の翻訳に続くあたりで、根岸・前田 [1994] pp.15-20 は、ラオス宗教省刊行の「クンブロム伝説¹⁰」を翻訳・紹介している（前田の手による訳。以下、前田 [1994] Ver.）。

その前田 [1994] Ver. のあらすじを示すと、以下のようになろう。

大昔、天の神が息子クンブロムを地上に派遣した。クンブロムはニュー夫妻とライ夫妻を先導に地上に降臨した。地上には巨大な蔓の巨木があり、天の神はそ

の伐採をニュー夫妻とライ夫妻に命じた。

伐採を進めていくうち、切り落とされた蔓に実っていた瓢箪からは、人類をはじめさまざまなものが生まれ出てきた（大きい瓢箪からは人類、象・馬などの動物、金銀、布など／小さい瓢箪からは人類、水牛・豚・鶏などの動物、ミカン・椰子・バナナなどの果物、野菜類）。

天の神は「この蔓の巨木を切り倒してからは、天地の行き来はできなくなる」と告げ、ニュー夫妻とライ夫妻が天寿をまっとうした後に人々に祀ってもらえるよう約束する。

こうして蔓の巨木は切り倒され、太陽が地上を照らすようになった。天寿をまっとうしたニュー夫妻とライ夫妻は国の守護神として祀られた。そしてクンプロムは地上を開墾し、耕作をはじめた。

一読すると分かるように、前田 [1994] Ver. は前掲の Finot [1959] Ver. とはかなりの相違点がある（一方、Finot [1959] の脚注に類話として掲載されているバージョン¹¹に類似している）。それら相違点を中心に、以下に検討を加えたい。

Finot [1959] Ver. では (1) 蔓に実った瓢箪からラオス人の祖が誕生 (2) クンプロムが老夫婦を先導に地上に降臨 (3) 天と地の繋がりが切断 (4) 蔓が空を覆い日光を遮断～クンプロムが従えていた老夫婦が蔓を切断 (5) 農業が可能となる、となっていた筋が、前田 [1994] Ver. では (2) → (4) → (1) → [(5) →] (3) → (5) の順になっている。

また、Finot [1959] Ver. では、蔓については (a) 人類創生の瓢箪を実らせた蔓 (b) 天と地上を結んでいた蔓 [橋] (c) 地上を覆ったので老夫妻に伐採された蔓という三種類が登場し、これらはそれぞれ別個である。ところが前田 [1994] Ver. ではこれらが一種類の蔓として描かれている。すなわち、(c) 地上を覆った蔓を伐採することになったが、(b) その蔓に実った瓢箪からは人類が誕生し、(a) そして伐採によって天と地のつながりは絶たれた……と、なっている。

ここで前田 [1994] Ver. において、蔓の伐採によって人類および人類のみならず畜産の動物や食料となる植物も誕生したとされている点は注目すべきであろう。このように前田 [1994] は蔓伐採譚を明確に創造神話として語っている。また、

蔓の伐採によって農業が可能になったことは Finot [1959] Ver. でも示されているが、前田 [1994] はさらにそれを強調していることが伺える。

以上を鑑みると、前田 [1994] Ver. における蔓伐採譚は、そこに祖先の誕生、農業の開始、天と地の分断（による天の支配からの独立）、すなわち人間の自治の開始が集約されており、単なるニュー夫妻の英雄譚にとどまらず、ラオス人の歴史の始まりを語った神話となっている点が特徴といえる。そして付言すると前田 [1994] Ver. においては、伐採作業にはニュー夫妻のみならずライ夫妻も参加しており、またニュー夫妻は作業によっては亡くならず天寿をまっとうしている。その分、プーニュー・ニャーニュー夫妻の英雄譚としての性格は Finot [1959] Ver. よりも薄まっているといえよう。

なお、こうしたプーニュー・ニャーニューの蔓伐採譚の類話は、アジア一帯、そして日本にも見られる。大林 [1989] は、巨樹にまつわる神話・伝説について述べる中で、『今昔物語集』本朝世俗部（卷三十一、第三十七話「近江国栗太の郡に大柞を伐りし語」）や『三国伝記』に「原古において巨樹が聳え、その日陰で人々は農耕ができなかった。この木が伐り倒されて、はじめて農耕が可能になったという形式」（p.378）の説話があることを指摘している¹²。そして大林は、この説話形式を「巨樹神話として、私が本来の形と考えている」（同前）と断じ、その理由として「東南アジア、少なくともその大陸部に類例がみられるからである」（同前）とし、くだんのラオス／ラオ族の建国神話（Finot [1959] に依る）と、インド東北部アッサムのカシ族の神話を挙げ、「ラオ族はタイ語族、カシ族は南アジア語族に属しており、この巨樹神話は語族にまたがって分布している神話形式である」（pp.378-379）と指摘している。

このように蔓伐採譚の類話、すなわち「原古において巨樹が聳え、その日陰で人々は農耕ができなかった。この木が伐り倒されて、はじめて農耕が可能になったという形式」の説話は、語族をまたいでアジアに分布し、そして日本にも伝搬していたわけだが、そこで敢えて筆者がその関連作品として加えたいのが、宮沢賢治（1896-1933）「ペンネンノルデはいまはいないよ 太陽にできた黒い棘をとりに行ったよ」（以下「ペンネンノルデ」）である。

「ペンネンノルデ」は、初期の代表作「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」

(大正10-11年頃?、以下「ネネムの伝記」)が、後期の代表作「グスコブドリの伝記」の原型にあたる「グスコンブドリの伝記」(昭和6年?)に改稿される中で書かれた創作メモである。そのような性質ゆえ、本作はそもそも(完成した、もしくは完成をめざした)「作品」ではなく、がために諸々の推察を交えて補完・再構成しないと文意の分からない点もあるのだが、それを踏まえて以下に検討する。

「ペンネンノルデ」はその題から明らかなように、主人公のペンネンノルデ／ノルデが「太陽にできた黒い棘」を除去しに行くという筋である。物語は「一、ペンネンノルデが七つの歳に太陽にたくさんの黒い棘ができた。」(宮全13 p.306)との場面から始まり、「十二、ノルデは太陽から黒い棘をとるためにでかけた。」(宮全13 p.307)との場面以て終わる。このノルデが除去しに行く「太陽にできた黒い棘」は、結論から言えば《太陽の障害物》であり、したがって同作は、同様に太陽の恵みを阻害する蔓や巨樹を除去する物語たる蔓伐採譚・巨樹伝説と同趣といえる。

なお「ペンネンノルデ」の完成形である「グスコンブドリの伝記」(および更に後続の「グスコブドリの伝記」)は、《冷害により不作となり、飢饉が到来する》という挿話から始まり¹⁵、そして主人公ブドリが我が身を犠牲として冷害を解消するという挿話¹⁶で終わる。「ペンネンノルデ」には不作／冷害を示す文言・表現は直接的には見られないが、ここで注目すべきは大沢 [2016] p.80bにおける、「ペンネンノルデ」の構想が岡田武松『気象学講話』の「年平均気温は黒点の最少年度の少し前に最も高く最多の年に最も低い」という文に由来するとの仮説である。すなわち賢治は「太陽黒点が最多の年に気温が低い」という統計情報を、「ペンネンノルデ」において「太陽にできた黒い棘」によって冷害が発生した」と物語化した……と見るのである。そしてノルデは(後続作の主人公ブドリが冷害を解消し人々を救ったのと同様に)冷害を解消し不作を改善すべく「太陽から黒い棘をとるためにでかけた」のだと想定される。

このように「ペンネンノルデ」は《太陽の障害物を除去し、農耕を可能にする》という物語と想定され、これは上記のプーニュー・ニャーニューの蔓伐採譚およびその類話となる巨樹伝説と、まさに共通する。残念ながら賢治が蔓伐採譚や巨樹伝説を見知っていたかは不明であり、そこに直接の影響関係を断定することは

現時点ではできないが、しかし同作を蔓伐採譚・巨樹伝説の一派生として説話伝搬の系譜に含んでおくことは一応可能であろう。

そして、「太陽から黒い棘をとるためにでかけた」ノルデは、まさにその題に「ペンネンノルデはいまはいないよ」とあるように帰還せず、文字通り《帰らぬ人》となったことが示唆されている。また前述の通り「グスコブドリの伝記」・「グスコブドリの伝記」では主人公ブドリが冷害を解消するために殉職する結末を迎えていることも合わせ見ると、ノルデは《太陽の黒い棘》を除去（し冷害を解消）するために我が身を犠牲にしたことが推察される。このようなノルデの行動は、まさにプーニュー・ニャーニューが蔓伐採譚において見せた犠牲と共通する。そして、かかる犠牲的精神の行動は、賢治の作品の随所に描かれるところであり、それらは仏教における菩薩の捨身譚に基づく¹⁷と目されている。かかる賢治によって生み出された捨身譚（いわば近代の「仏教説話」）の一例として「ペンネンノルデ」も位置づけ得るのであり、そこにプーニュー・ニャーニューの蔓伐採譚との類似が見られる点は注目に値する。

ここで改めて考えてみるに、そもそもプーニュー・ニャーニューの蔓伐採譚には仏教色はなく（上記の Finot [1959] Ver. や前田 [1994] Ver. などの蔓伐採譚はいわば創造神話中の挿話だが、そもそも創造主を立てない仏教は創造神話と相容れない）、日本における類話である「近江国栗太の郡に大柞を伐りし語」も『今昔物語集』において仏法部ではなく世俗部に分類されていた。それにもかかわらず今日においては、プーニュー・ニャーニュー信仰は上記アハム寺院の例に見られるように仏教と習合しており、そして宮沢賢治が「法華文学ノ創作」（宮全13 p.563）すなわち仏教文学を志す中で蔓伐採譚と同工異曲の作品「ペンネンノルデ」を遺すに至っている。ここにラオス仏教と日本仏教（ことに法華信仰）との稀有な synchronicity を見られないだろうか。

3. ルアンパバーン地区の寺院視察：その他

ここで、上記アハム寺院以外のルアンパバーン地区内の寺院についても若干の言及をしておきたい。

タートルアン寺院

筆者の研究領域から注目したのは、タートルアン寺院の壁画に含まれている所謂「田螺女房」説話の一形態と推察される絵物語である。

「田螺女房」の説話は中国・朝鮮・日本などで見られる有名な異類婚姻譚で、要するにいわゆる「鶴女房（鶴の恩返し）」と同類型の説話である（なお説話を専門とする筆者は、この田螺女房説話について、学术论文ではないものの随想を一編草している。岡田 [2021] 参照）。

仏教と田螺女房説話の関わりについて見ると、たとえば宋代の禅籍『祖庭事苑』にも田螺女房説話の一例が引かれている（南方 [1971] p.281参照）。しかしその例以上に、このタートルアン寺院の壁画は興味深いものがある。壁画それ自体（おそらく同一または類似の業者が受注したと思しき作風の酷似した壁画が同地区内の他の寺院にも多く見られた）の史的・美術的な価値はさておき、今日のラオスにおける仏教そして民間信仰のありようを反映した事例として、注目すべきと思考する。



パバートタイ寺院

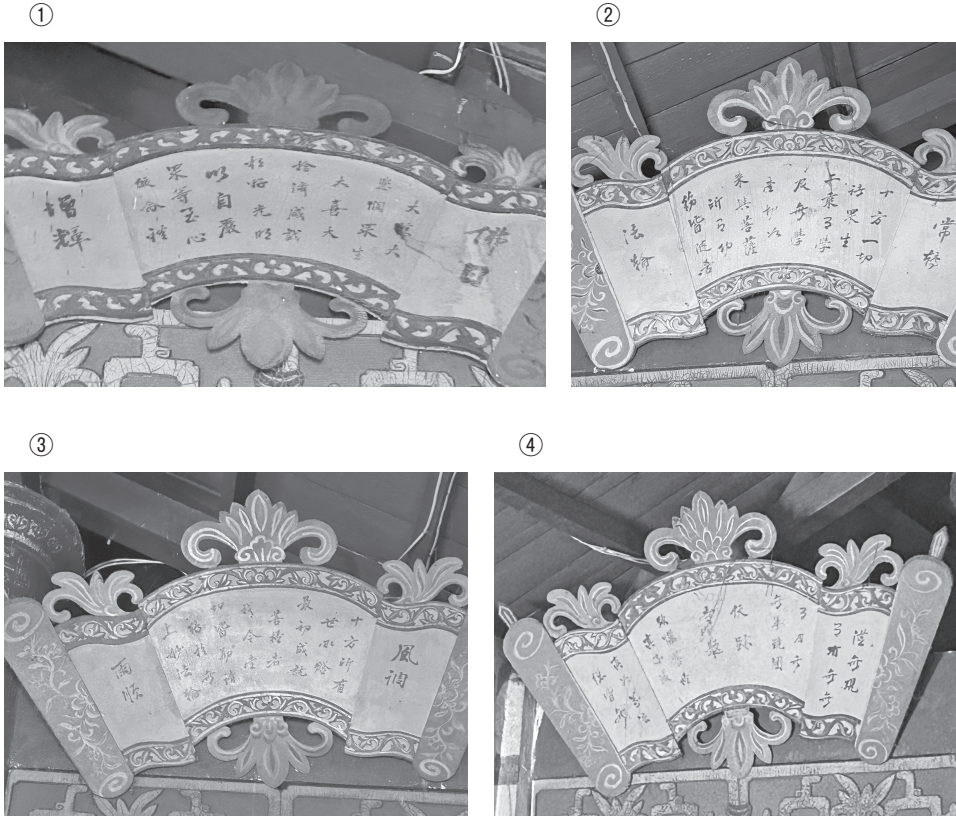
パバートタイ寺院はベトナム仏教の様式を持つ寺である。ベトナム仏教は北伝仏教であり、大乘の要素を孕んでいる。

同時の堂内には、大乘仏教の色濃い反映が随所に見られる。まず本尊の両脇に立てられた二本の柱にそれぞれ「南無娑婆教主本師釈迦牟尼仏」「南無極樂世界接引導師阿弥陀仏」と書かれ、釈迦のみならず大乘固有の仏たる阿弥陀仏が勧請されている。



さらに堂内には四枚の額が掲げられているのだが、そのうち三枚に「八十八仏大懺悔文」の一部が①「大慈大／悲憫衆生／大喜大／捨濟咸識／相好光明／以自嚴／衆等至心／歸命禮」②「十方一切／諸衆生／二乘有學／及無學／壹切如／來與菩薩／所有功／徳皆隨喜」③「十方所有／世間燈／最初成就／菩提者／我今壹／切皆勧請／転於無／上妙法輪」として書かれている。このうち②③は大乘經典の『華嚴経』から抄出されて同懺悔文に含まれた文である（大正10.847a18-21）。¹⁸

このようにルアンパバーン地区内にあつて大乘仏教信仰を守っている同寺は、アハム寺院の例とならんで、同地区における多様な仏教信仰（厳格な上座部仏教一辺倒ではない）のありようを示す寺院といえる。



4. まとめ

南伝の上座部仏教は、大乘以前の初期仏教の流れを汲むという一種の純粋性において、こと近代以降において評価を集めてきた。しかし上座部仏教もまた大乘仏教がそうであるように、多彩多様な変化によって今日に生きているのである。そうした有りようを、ラオスに今日見られる仏教信仰は如実に伝えている。それは今に生(活)きる仏教の真実として、大いに注目さるべきものだろう。

〈謝辞〉

当該プロジェクトへの参加および本稿執筆に際しては、身延山大学特任教授・柳本伊左雄先生をはじめ、Sintheva SAYASANE氏、アハム寺院の関係者の方々、本事業の主任である本学国際日蓮学研究所研究員(当時研究生)の鈴木義孝氏、同研究所庶務の池田健太郎氏ら多くの方々に多大なご助力を頂きましたことに、謹んで甚深の謝意を表します。

(テキスト)

大正新修大藏経→大正

『真訓両読 妙法蓮華経並開結』、平楽寺書店、1924→開結

『新校本宮沢賢治全集 第8巻』本文編、筑摩書房、1995→宮全8

『新校本宮沢賢治全集 第11巻』本文編、筑摩書房、1996→宮全11

『新校本宮沢賢治全集 第13巻』(下)本文編、筑摩書房、1997→宮全13

(主要参考文献)

Louis Finot [1959] "Legendary Origins" Runé De Berval (ed.) *Kingdom of Laos* France Asia: pp.379-381.

池上要靖 [2001] 「ラオス仏教の現況 :Luang Prabang 地区について」『東洋文化研究所所報』5, pp.55-68.

大沢正善 [2016] 「宮沢賢治とアレニウスの宇宙観」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』(35)3, pp.44-91.

大林太良 [1989] 「巨樹と王権 神話から伝説へ」『日本伝説大系』(別巻1 研究編) みずうみ書房, pp.373-385.

岡田文弘 [2021] 「田螺物語」『最上教報』845, pp.28-31.

菊池陽子 [2002] 「精神紀行 ラオス 神話と伝説の古都ルアンパバーン」『穹+』7, pp.38-43.

木村中一 [2017] 「ルアンパバーン世界文化遺産地域仏像修復プロジェクトの現状とラオスに残る仏教信仰」『日蓮学』1, pp.17-28.

田村克巳 [1995] 「ラオス、ルアン・パバーンの新年の儀礼と神話——東南アジアの水と山」松原孝俊・松村一男編『比較神話学の展望』青土社, pp.157-177.

根岸範子・前田初江 [1994] 『ラオスの民話』黒潮社

南方熊楠 [1971] 「水の神としての田螺」『南方熊楠全集』2 pp.280-281.

山田耕太 [2005] 「銀河鉄道の夜」における死と生」敬和学園大学編『人文社会科学研究所年報』3, pp.73-87.

註

1 日程は以下の通り。2023/2/18: シエントーン寺院、ヴィスナラート寺院、アハム寺院。2/20: アハム寺院。2/21タートルアン寺院、マイ寺院、パバートタイ寺院。2/22: マノーロム寺院。

2 池上 [2001] p.59

3 池上 [2001] p.59

4 なお田村 [1995] pp.163-165が採録するプーニュー・ニャーニュー伝説 (p.177 注4による) と出典は Aijmer, Goran *Reconciling Power with Authority: An Aspect of Statecraft in tradition Laos, Man* (N.S.) 14, 734-749, 1979. 以下、田村 [1995] Ver.) では、アハム寺院とプーニュー・ニャーニューになぜ関わりがあるのかについて説明する縁起が含まれている (本稿注5参照)。

5 なお田村 [1995] Ver. は、プーニュー・ニャーニューがライオン退治によってサンカロク(今のルアンパバーン)の地(今のルアンパバーンの)危機を救い、そしてその時に負った傷のために死去した、との挿話を含んでいる。この田村 [1995] Ver. も蔓伐採譚と同様、プーニュー・ニャーニュー

が人々の危機を救い命を落とすという筋になっている。

また田村 [1995] Ver. については、以下の2点を注目すべきであろう。

- プーニュー・ニャーニューが地上にもたらした種から実ったカボチャからラオ人が誕生したとなっており、プーニュー・ニャーニューが創造主もしくは人類の始祖のような役割を担っている。
 - 「退治したライオンを閉じ込めた場所の近くにヴィスン・ナラート寺院の仏塔が建てられた」と末尾にあり、プーニュー・ニャーニューとアハム寺院（ヴィスン・ナラート寺院に隣接）の関連を説明する縁起となっている。
- 6 大林 [1989] p.385 脚注(7)
- 7 なお田村 [1995] pp.165-166も、この Finot [1959] Ver. の要約とみられる挿話を採録している。
- 8 “crushing them beneath its weight” (Finot [1959] p.381) の文を根岸訳は「蔓はその重みで崩れ落ち」(p.14) とするが、ここは「二人は下敷きとなって潰れ死んでしまった」(大林 [1989] p.379) と解すべきだろう。
- 9 “The married couple is familiarly referred to as Phu Yū Ya Yū.” (Finot [1959] p.381)
- 10 Silā Vīravong “*Nithān Khun Bōrom Rāsāthirāt*” Kasūang Thammakān Viangčhan, 1967 (未見)
- 11 太陽を覆う瓢箪の木を伐採していると、その瓢箪から人間や動物が生まれる。この伐採にはライ夫妻も参加する（ヨー老人とヤーガーム＝プーニュー・ニャーニューが蔓を、ライ夫妻が木を切る）。それによって天地の繋がりが切断される。
- 12 pp.375-378.
- 13 pp.379-380. そこで Finot [1959] については『今昔物語集』巻三一・三七話と比較して「柞と蔓という樹の相違はあるものの、全体として、『今昔物語』の例に極めて近いと言ってよい……ラオスのように、これによって農耕が可能となり、王国が始まったという建国神話の形をとるのが、恐らく本来の姿であったろう」(p.379) と述べている。
- 14 大沢 [2016] p.80b.
- 15 また「ペンネンホルデ」の原型である「ネネムの伝記」も、『不作により飢饉が到来する』という場面から始まっている。その不作の原因については、やはり「グスコブドリの伝記」・「グスコブドリの伝記」同様に冷害であったことが推察される。「ネネムの伝記」の冒頭は、同作の舞台「ばけもの世界」に飢饉が到来するとの場面だが、その描写にある「そのまま夏になりましたが、ばけものたちはみんな騒ぎはじめました」(宮全8 p.305) との文から、夏に不作をもたらす異常気象すなわち冷害が起きたと暗示されているのである。
- 16 ブドリは火山を人工的に噴火させ、その温室効果によって冷害を解消する。その噴火に巻き込まれブドリは命を落とすと暗示されている。
- 17 一例を挙げると「僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からなんかも百ぺん灼いてもかまわない」(『銀河鉄道の夜』宮全11 p.167) と「以神通力願、而自然身、光明遍照八十億恒河沙世界」(『法華経』薬王菩薩本事品第二十三、開結 p.515)。「蠟の焼死は、仏教の焼身供養(『法華経』薬王菩薩本事品第23など)に由来することがしばしば言及されている」(山田 [2005] p.86 脚注28)
- 18 なお残り一枚④に書かれている文は、ベトナムの禅者である慧中上士(1230-1291)の詩文「萬事歸如」(Thơ văn Lý Trần (tập II), NXB Khoa học xã hội, 1988参照)の抄文と推察される。